

「建築・庭園」分野

現在、京都府内には茶の生産・流通および喫茶文化と直接の関わりをもつ建築・庭園の遺構が数多く確認できる。それは建築・庭園といった単体から伝統的な街並み、さらには文化的な景観としての広がりをもって存在している。【資産リスト参照】

茶室と露地

宇治茶の喫茶文化が生んだ建築・庭園資産として特筆されるのは何といたっても茶室と露地である。これは世界に類をみない性格をもった日本固有の建築・庭園であるといえる。

茶室とは茶事を行うための施設であり、それは茶室と呼ばれる建築と露地という庭から成り立っている。茶室は建築や庭として事物的に茶事の機能に適応するだけでなく、茶の思想や哲学、精神性をも具現することを条件としてつくられてきた。これは茶事に必要とされる道具すべてに共通することであり、したがって茶室もまた茶事ための道具であるともいえる。

中世における殿中の茶から侘茶へと発展する過程で、茶室は劇的な変貌を遂げた。侘茶に適応しうる茶室が草庵の茶室である。

茶室の草庵化とは、式正な座敷を美しくやつし、くずすことによって、侘茶にふさわしい茶室を形成する過程を意味する。書道で方正な書体である楷書を真とし、それに対して行書、草書というくずし方があるように、建築では格式のある書院座敷を真の座敷としてとらえ、わび茶にふさわしい座敷を草体化された茶室、すなわち草庵茶室と呼ぶ。草庵とは文字通り草の庵を造形の理想としていることばで、藁や草、あるいは自然の丸太など自然材で構成されるような粗末（匱相）な手法を積極的にとり入れた建築を意味する。

当然そこには、無駄を省き、自然と共生しようとする明確な意図がはたらいており、茶室の建設現場においては、そのような建築を具現化するための技術が育まれてきた。

茶室建築がもつ特異な性質として移築や増築、あるいは改築が容易な構造になっている点をあげることができよう。

茶室は茶の湯の道具としての性格をもつものであるから、それは季節によって室礼を変えたり、ときには移動したりすることも前提として造営される施設である、ともいえる。

現在国宝に指定されている茶室（待庵、密庵…以上京都府、如庵…愛知県）がいずれも移築を経て国宝にしてされており、また忘筌や千家に建つ茶室なども、いずれも移築、再建をくりかえしながら、その歴史的価値を積み重ねてきた建築である。

移築・改築が容易であることを旨とした建築技術は、日本の木造建築技術の共通した性格であるともいえる。しかし「いかような座敷がよく候ぞと問われた」千利休が「うめ木のおおい座敷がよく候」とこたえたという伝え（『茶話指月集』）にあるように、移築、増築、改築を繰り返しながら使いつづける建築の価値をより積極的に認め、それを建築的に表現した茶室の建築技術は日本の建築の中でも特異な存在であるとともに、日本独特の木造建築技術を育む大きな要因になったといえよう。

さらに、江戸時代以降は煎茶の流行とも相まって、従来の規矩にとらわれない自由な形式の茶室や露地が出現し、近代以降のいわゆる和風建築という建築文化を誘発した。

煎茶の思想的背景にある中国文人たちへの憧憬は、当然ながら中国的な意匠を積極的に取り入れる傾向がうまれた。と同時に従来の侘茶が理想として抱いていた隠遁者の境遇への憧れが共鳴し、茶室に新たな造形を生み出したといえる。

煎茶の茶室は「茶所 　いづくにても膝を容るる所あらば煮るべし」（大枝流芳『青湾茶話』1756）とあるように、特にこれといった形式を必要としないが、素材として唐木や珍木・奇木といわれるような自然材、あるいは竹を多用し、開口部に意匠や高欄、棚などの意匠に変化をもたせ、部屋を外部に開放させて眺望や清風を積極的に室内に取り入れるような建築が志向された。

茶室は、建築における日本の歴史様式として捉えられるものではなく、特に茶室の造営にかかわる技術的性格は、日本建築の中でも特異な性質を有しており、それは現代建築に活かし、未来に向けて発展しうるものであるといえる。

また文人画などに描かれる山水幽谷の景色は、自然式庭園ともいわれるような、滝や流れを主体とした近代庭園を生み出すきっかけにもなった。

待庵や大徳寺にある茶室、あるいは桂離宮などの建築が諸外国の建築家を魅了し、自国での建築活動に大きな影響を与えてきた。桂離宮の美を絶賛したドイツの建築家ブルーノ・タウトなどはその一例であろう。

また海外にも多くの茶室が造営されており、世界の建築に影響を与えている。

1935年、スウェーデンのストックホルムにある国立民族学博物館に、実業家で数寄者であった藤原銀次郎の尽力で「瑞暉亭」が建設された。それは日本庭園の中に建つ切妻造棧瓦葺の建物で、炉が切られた四畳半の茶室に水屋が付属し、六畳の別室をもった本格的な茶室であった。スウェーデンにおける茶文化の理解と普及を主眼にして建設された茶室であったが、当時、同国で活躍し、世界でも有数のモダニズム建築家グンナール・アスプルンド（1885-1940）は「瑞暉亭」を見て、初めて日本の茶室建築に触れ、自身の建築観に多大な影響をおよぼしたことが知られている。

茶室は、単に日本国内の建築様式としてとらえられるものではなく、世界の建築観、特にモダニズム建築思想の確立に一役を担っていた。

和東町の宇治茶の茶畑景観（京都府選定文化的景観）

選定地は、宇石寺、白栖、撰原、釜塚、原山の各一部の地域で、総面積約 96ha を測る。

和東町における茶栽培の歴史は、海住山寺の慈心上人が高山寺の明恵上人から茶の種子を分与され、これを鷲峰山麓の原山で栽培したのが始まりという。現在、和東で生産されているお茶は、玉露、かぶせ茶、煎茶、碾茶、番茶などいくつもの種類に及ぶ。なかでも煎茶の生産は府内一である。

和東町の茶畑は広大な台地上に広がるものではなく、丘陵の起伏に沿って山裾から山頂近くまで展開する。大きく地形を改変していないからこそ、茶畑の中に古墳や古道、石仏、磨崖仏など歴史的遺産を含み込んでいる。そうした点での代表的な景観は、白栖

にある伝安積親王墓周囲の茶畑である。

宇治茶という観点からみた「宇治の文化的景観」

「宇治の文化的景観」は宇治川、宇治市街地および茶園を中心とした文化的景観で、平成 21 年 2 月 21 日には文化財保護法に基づく重要文化的景観に選定された。選定にあたっては、山紫水明の宇治川の流れを骨格として、古代以来の歴史が重層的に表出している市街地、世界遺産の平等院・宇治上神社に代表される社寺などの文化財、そして伝統的な宇治茶の生産・加工の生業文化が融合した景観が高く評価されている。

そのうち、宇治茶の生産・加工については、大きく茶園景観と街並み景観が挙げられる。前者の茶園景観は、市街地内の空間地もしくは郊外に展開するが、とりわけ覆下園と呼ばれる茶園景観が他地域とは異なる宇治独特の景観を生み出している。後者の街並み景観は、主に宇治橋通・本町通・県通沿いに展開しており、江戸時代には茶問屋・茶師屋敷が軒を連ね、また茶園経営・製茶に従事した茶生産農家もこれらの通りに主屋を構えていた。近代に入り、付近への工場進出や住宅開発に伴い、商店街としての様相が加わったほか、世界遺産平等院への観光客向けの土産物販売店が増加したが、そのなかにも宇治茶を売り出す店舗が多く、宇治茶という地域の生業を活かした街並みが継続している。もちろん、このような継続の背景には、宇治茶の生産と製造にかかわる生業のシステムが維持されていることを忘れてはならない。

宇治茶の生産・製造だけをみれば、(中近世に比べて)近代以降はその面的展開が縮小していることは事実であり、「茶畑」のみ、もしくは「茶問屋」のみといった、単一の景観が広がっている状況にはない。しかし、少なくとも国内法で選定された文化的景観の枠組みでいえば、古代以来の重層性が評価されており、近世以降、商店街・住宅地という新たな層が加わっているとみることができ、その中でも宇治茶という層が明確に景観上に残されていることが重要である。

この重層性が、世界遺産における Cultural Landscape の枠組みのなかで評価されるかどうかポイントになるだろう。

【資産リスト】

茶室成立初期の遺構として

- ・東求堂
- ・待庵

家元の茶室

- ・表千家 不審庵茶室
- ・裏千家 今日庵茶室
- ・武者小路千家 茶室
- ・藪内家 燕庵

茶室の展開を示す遺構として…武家や宮家との関わり、町人や茶人たち、哲学・宗教との関わり、

- ・密庵
- ・大徳寺 弧篷庵忘筌
- ・大徳寺 聚光院閑院席
- ・大徳寺 真珠庵庭玉軒
- ・南禅寺 金地院八窓席
- ・水無瀬神宮 灯心亭
- ・西翁院茶室（澱見席）
- ・西芳寺湘南亭
- ・大徳寺 玉林院蓑庵
- ・仁和寺 遼廓亭
- ・仁和寺 飛濤亭
- ・曼殊院 八窓席
- ・高台寺 時雨亭・傘亭

茶室から生まれた新たな建築として…数寄屋造

- ・伏見稻荷 御茶屋
- ・桂離宮 御殿および茶屋群
- ・修学院離宮 茶屋群

煎茶の遺構

- ・蓮華寺 京都市左京区上高野

寛文二年（1662）に西八条塩小路より移転。加賀前田家の老臣今枝民部近義が祖父の今枝垂直の菩提のために移転、再興したと伝えられる。再興に際して石川丈山や狩野探幽、木下順庵、黄檗の隠元、木庵ら当時の代表的な文人たちが協力した。本堂や庭園は当時のもの。高雅な文人趣味。

・詩仙堂 京都市左京区一乗寺

徳川家康に仕えた石川丈山が武士を捨て、寛永13年に建てて閑居したところ。選んだ三十六詩人の絵は狩野探幽。

・萬福寺 有聲軒

1928年（昭和3）9月、全国の煎茶家の集りである高遊会が宇治の黄檗山萬福寺境内に売茶翁を祀るための売茶堂を新設し、同時に落慶記念の煎茶会を開催した。有聲軒も売茶堂と同じく新設されたもので、数寄を凝らした茶寮。有聲軒の設計は永藤朝翠翁という道具商（「大阪時事新報」昭和3年9月16日）

・涉成園

真宗大谷派東本願寺の別邸。1653年（承応2）に石川丈山によって作庭された庭園といくつかの茶亭からなる。涉成園の名は中国六朝時代の詩人・陶淵明の詩にちなむ。『涉成園記』に庭園と茶亭を使った茶会の様子が伝えられる。

・山紫水明処

江戸時代後期の遺構。1822年（文政5）、当地に移り住んだ山陽はこの屋敷「水西荘」に造営した書斎兼茶室。抹茶より煎茶を好んだ山陽は、脇に流れる鴨川の水を汲んで煎茶を入れて、形式にとらわれない、自由な茶の湯を楽しんだと伝えられている。「山紫水明処」も、形式にとらわれない生活・接客の空間として、明るく開放的なつくり。障子にガラスを用いたり、欄干に中国風の意匠を用いたりするなど、随所に煎茶の影響が感じられる。庭には鴨川の伏流水がわき出す「降り井」がのこる。

茶室から生まれた新たな建築として…近代和風

- ・野村碧雲荘
- ・清流亭
- ・廣誠院
- ・三井家京都別邸
- ・清風荘
- ・松殿山荘